



自死予防の活動をめざす人たちのスキルアップ講習会

主催 藍の会
宮城県自殺対策緊急補助金事業

「うつ」病治療における薬とメンタルケアの常識とは？

開催日 : 12月3日
場所 : エルパーク仙台 5階 セミナーホール
時間 : 14:30~17:30
入場料 : 無料

司会 寺島英弥 河北新報社 編集委員

14:30 はじめの挨拶 田中幸子 藍の会代表

14:40~16:00 講師 小倉謙 市民人権擁護の会
日本支部世話人
(抗精神病薬、抗うつ薬、向精神薬、抗不安薬、等のおはなし)

休憩 16:00~16:10

16:10~17:10 講師 神春美 (社)日本産業カウンセラー協会
東北支部副支部長

(カウンセリングのおはなし)

17:10~17:30 会場からの質問の時間
終了

救えるいのちがあります

2010年4月

自死者の約7割が精神科を受診、通院している最中であつたというデータを全国自死遺族連絡会は1016人の遺族の調査で明らかにしました。3年前の調査では5割弱でした。

治りたい！元気になりたい！と多くの人が治療を受けています。

もしあなた自身やあなたの大切な人がいま、精神医療を受けているのなら、そして不安や疑問を感じているなら、一度考えてみてもらいたいのです。「診断は正しいのか？処方された薬の効能は？副作用は？」と・・・

皆さんは「専門家である医師が間違えるはずがない」と思うでしょう。

しかし、治療を受けるたびに薬が増えている、思考力が低下している、よだれがたれる、手が震える、悪夢を頻繁にみる、突発的に攻撃的になる、顔の形相が変わった、などなど「あれ？」と、感じていることがあつたら、それは誤診・誤処方によるものかもしれません。

それでも、医師を信じたいと思い、医師の指示に従い、治癒を願い、不安や疑問があつても、「治るために」薬を飲み続けているひが多いのです。しかし現実には治療を重ねるたびに状態は悪化し、新たな症状が増えて行き、最悪の事態は自死ということに陥るケースもあります。

自死予防を考えたとき、絶対に精神医療の問題を論ずることを避けてはならない、と家族を自死で亡くした遺族、現場の専門家は感じています。

それは愛する家族を亡くして気付いた、身を切るような経験からの提言でもあります。死にたくて死ぬひとはいません。生きていたいと願いつつ追い詰められた人たちの、命をかけたメッセージを少しでも役にたててもらい、うつ治療の「常識」といわれる知識や情報の再考につながる、「治る精神医療」になることを願っています。

「話す」ことを大切にし、心が元気を失う原因を取り除き、思考の癖の改善をそのための自分に合うカウンセリングをして、最小限の薬治療を！！

あなたの受けている治療は間違っていないですか？